

# 機能からみた前置詞の再分類

——実から虚へ——

中 西 千 香

提要：

一般认为，介词是个比较复杂的类。现代汉语中的介词大都由动词虚化而来，因其虚化过程的不同，介词所留存的功能也是多种多样的。介词中的各个成员，其功能也不尽相同。因此，日本人在汉语介词的习得过程中会感到困难。比如说，要表达某一语气时，应选择哪个介词？介词A和介词B均可以与某一动词搭配使用，此时两种在表达意义上有何不同？“不”“想”等修饰成分应该放在介词前边还是动词前边？什么样的介词短语可以出现在句子的开头？什么样的介词短语可以放在动词的后面？等等。

为了解决这些问题，本文试图按照介词的虚化程度将介词分成几个小类。为了介词的分类，笔者参考了俞士汶2003《现代汉语语法信息词典》「介词库」。俞士汶2003在《现代汉语语法信息词典》的「介词库」中，将85个介词按照21个条件进行了划类分析。但是，俞士汶2003的分类依然存在一些问题。笔者将先对「介词库」中收录的介词进行增删和整理，然后对整理后的介词进行重新分类。通过重新分类，分析各个介词的虚化程度和小类的基本功能。

## 0. はじめに

現代中国語における前置詞は前置詞という一つの品詞でくくられているものの、個々の機能はさまざまである。本稿は、個々の前置詞のもつ機能から、動詞性の濃淡のレベル（実と虚の差）を導き出し、前置詞の分類を試みる<sup>1)</sup>。

今回、分類のよりどころとして、俞士汶2003『現代汉语语法信息词典』の「介词库」の調査結果を参考にする。ここでは、「介词库」の調査結果と実際の用例を通して、前置詞の機能をみ、前置詞の虚化の度合いの差を示していく。前置詞のつくる文型の特徴や修飾成分のくる位置等から前置詞を分類し、それぞれのグループの前置詞のもつ特徴について考えたい。

まとめでは分類の結果を表にし、そこからみえる前置詞の傾向、その他周辺の用法なども加えて、用法が異なる前置詞の全体をみる。また、文中で前置詞フレーズが複数なれば場合((S) + PP<sub>1</sub> + PP<sub>2</sub>…… + VPで表わす)についても少しふれたい。

## 1. 問題提起～前置詞構文の特徴から

通常、現代中国語において、前置詞が用いられる文を考えると、典型的な文として、NP<sub>1</sub> + P + NP<sub>2</sub> + VP + (NP<sub>3</sub>)。が思い浮かぶ。

これは、前置詞が連動文の第一動詞の位置におかれることから始まり、この位置におかれた動詞が恒常化することで、動作性が薄れ、前置詞としての地位を確立していくことからである<sup>2)</sup>。

しかしながら、動詞から前置詞へと発展する中で残している機能も当然存在する。例えば、否定副詞などの修飾成分が前置詞の前におくことが可能であることがそうである。一方、前置詞フレーズがこの位置(VPの前)におかれることが恒常化し、より虚な機能を獲得すると、前置詞の機能語としての役割が濃厚になり、動詞フレーズの前に、これら修飾成分がくることができるようになるのである。

これらの前置詞の機能は前置詞の動作性の濃淡によって、それぞれ異なるのである。

そして、前置詞フレーズが文頭にくるパターンの扱いについても考える必要がある。文頭におくことができる前置詞や文頭にしかおけない前置詞は限られる。これは前置詞の用法の中ではより虚な用法と言え、前置詞の動詞性の濃淡をみきわめる一つの要因となる。また、“从～到～”のように文頭にPP<sub>1</sub>とPP<sub>2</sub>が並んで“框式介词”を形成する場合もある。ここまできると、前置詞の用法の中でも、機能語としてより濃い用法となる。これらについてもどのような前置詞がどのような形であらわれるのかをみたい。

本稿では、個々の前置詞の機能を検証するために、俞士汶2003『现代汉语语法信息词典』の「介词库」を参照する。次節で「介词库」がどのようなデータなのか、その内容を概観し、問題点にふれる。また、データをふまえて、筆者なりに決めた、分類のための留意点を述べる。

## 2. 「介詞庫」についてとその問題点

ここで俞士汶2003『現代汉语语法信息词典』の「介詞庫」について説明しておく。

「介詞庫」は、85個の前置詞に対して、どんな対象を引き出すのか、文成分の性質、主語の前にくるかどうか、独立成分になることができるか(“,”で区切ることができるか)、目的語にどんな成分がくるのか、前置詞フレーズのみで言えるかどうか、否定副詞が前置詞フレーズの前にくるのか、助動詞が前置詞フレーズの前にくるのかなど、21項目のチェック事項を立て、表にしたものである。

前置詞一つ一つの機能をみるために作成された「介詞庫」だが、全体を通してみれば、前置詞という一つの品詞にまとめられていても、個々の機能の範囲に違いがあることが同時にわかる。

「介詞庫」を検証することは、個々の前置詞の機能する範囲や機能化のレベルをみるのに大きな助けとなる。しかし、「介詞庫」自体に、問題を感じる部分もいくつかある。例えば、「跟」の扱いである。例えば、以下の例である。

- 1) 我不跟他一起走。(私は彼と一緒に行かない。)
- 2) 我跟他不一样。(私は彼と違う。)

後続に動作動詞がくる場合、否定副詞は“跟”の前におかれる。しかし、同等の比較対象を“跟”で導き、後ろに形容詞(一样, 差不多)などがくる場合は、述詞の前に否定副詞がくる。

先にあげた例文をみていただきたい。“跟”の目的語は同じ“他”であるが、1)は同伴の相手、2)は比較の対象で、2)の“跟”は1)の“跟”より前置詞の動詞性がより薄れている。それは、2)の“跟”には“跟”が本来もつ、“伴随义”がすでにないからである。“跟”の本来の意味から離れて、比較の対象を引き出す機能として“跟”が用いられるようになると、機能語の役割がより濃くなる。この二つの例について言えば、前者の否定副詞の場所はここでしかないし、後者の場合も否定副詞は両方におくことができるとはいえ、述詞の前におかれるのが普通である。

この二つの位置をみることは、前置詞の動作性の強弱の違いをみること

にもなる。これは“跟”に限ったことではなく、他の前置詞であっても同じで、同じ前置詞でも対象の異なりによって、他の要素の位置が変わる可能性があり、それによって、前置詞の機能化の度合いをみることができるのである。

このような違いがあるのにもかかわらず、「介詞庫」では、一つの“跟”として取り扱っている。本稿では、“跟”を“跟（比較、関係の対象）”と“跟（随伴、共同行為の対象）”の二つにわけることとする<sup>3)</sup>。また、“对”についても、同様に対象が異なると、用いられ方も異なるので、ヒトやモノを対象とする場合と、コト的なものを表す場合にわけるとする。

また、この「介詞庫」の中で前置詞として項目を立てている“只限”、“及至”も以下の分類からははずす。“只限”は辞書によっては見出し語として収録しないものもあるし、また、動詞として扱う辞書もあり、前置詞として扱うかどうかの判断が難しい。また、“及至”は前置詞よりも接続詞として取り扱う辞書もあり、同じく前置詞として扱うかの判断が難しい。したがって、今回の分類からははずすことにする。

また、比較や差異をあらわす前置詞“跟（比較の対象）”、“比”、“离”については、後ろに動作動詞がこないことから他の前置詞とは性質を異にするので、これらも今回の分類からは暫時はずす。しかし、これらが前置詞として、どのような文法的特徴があるのかここで少し述べておきたい。

まず、“跟（比較、関係の対象）”は、先述の通り、比較や関係の対象を引き出すことに徹しており、“跟”本来の意味からはすでに薄れている。また、後続の述詞は、通常、3)～6)のような、同異や関係をあらわすことができるだけで、どのように同じであるかや、どのように異なるかという場合は、7)のように状態補語を使うなどして、文を複雑にしなければならない。

3) 我跟他不一样。／我不跟他一样。(わたしは彼と違う。)<sup>4)</sup>

4) 学习和锻炼身体不对立。『H 详』: 143 (勉強と体を鍛えることとは対立しない。)

5) 这儿跟上面不对应。『H 详』: 144 (ここは上とはかみ合わない。)

6) 我跟他没什么关系。(わたしは彼と何の関係もない。)

7) 在这一点上，我跟他差得非常远。(この点においては、わたしは彼とははるかに劣る。)

“比”は、否定副詞“不”を用いる場合、“比”の前にくる。このことから動作性が残っていると言えよう。

“离”も本来の意味を残し、動詞性を保持しているようにみえるが、否定副詞については、述詞の前におかれる。この点から言えば動詞性は薄れていると考えられる。

ただ、“比”、“离”ともに単独では使えず、後続の述詞を必要とする点では、すでに純粹の動詞ではなくなっている。

以上をふまえて、検証する前置詞について、本稿での扱いをもう一度以下にまとめておく。

- ① “跟”…“跟（随伴、共同行為の対象）”と“跟（比較、関係の対象）”の二つにわけろ。
- ② “对”…対象によって、機能化のレベルが異なるので、“对（ヒト・モノ対象）”と“对（コト対象）”の二つにわけろ。
- ③ “只限”、“及至”…分類からはずす。
- ④ 比較や差異を表す前置詞“跟（比較対象）”、“比”、“离”…後に動作動詞がこないことから他の前置詞とは性質を異にするので、分類からはずす。
- ⑤ “随”…「介词库」の用例は“随着”の例しか掲載していないので“随着”に改める。

以下、残りの82個の前置詞に対して、グループわけを行う。

### 3. 文の中のPPの位置、否定副詞、助動詞の位置との関係からの5分類

これから、前置詞を分類するにあたり、前置詞構文について、確認をしたい。まず、前置詞が作る文型は以下の3つである。

A : NP<sub>1</sub> + P + NP<sub>2</sub> + VP + (NP<sub>3</sub>)。 (典型的な文型)

B : P + NP<sub>2</sub> + NP<sub>1</sub> + VP + (NP<sub>3</sub>)。

C : NP<sub>1</sub> + V + P + NP<sub>2</sub>

文型Aは前置詞が動詞起源で連動文の第一動詞の位置の固定から形成されるのであれば、これを典型的な文型と言えよう。このことから考えれば、文型Aの場合は、前置詞フレーズの前に修飾成分をおけるが、文型Bになると修飾成分をおけない。つまり、文型Bのほうが、より虚化、機能化した用法と言える。文型Cも形成可能であるが今回は対象としない。

中西2002、2005、2010では、“対”や“跟”がより虚な用法をすると、修飾成分を前置詞フレーズの前におけなくなり、“対(于)”は文型Bを形成可能であることをみた。

他の前置詞についてもこのような機能を検証することで、全体の前置詞の働きを概観することはできないだろうか。

そこで前述の「介詞庫」の結果をもとに、前置詞の虚化のレベルを確かめることにする。

以下、前置詞の動詞性の強弱によってグループわけをしていく。筆者が「介詞庫」の結果の中でも動詞性の強弱の判断材料として、注目する主な機能は以下の3項目である<sup>5)</sup>。

- i. 主語の前におけるか否か(主前後)
- ii. 否定副詞が前置詞フレーズの前にくるか否か(否定前後)
- iii. 助動詞が前置詞フレーズの前にくるか否か(助動前後)

まず、iの主語の前におかれるか否かだが、文型Aの枠を越えて、主語の前におけるもの、つまり文型Bを作る前置詞は、すでに動詞性を喪失した、または動詞性を喪失した用法ももっていると判断できる。

次に、iiとiiiの否定副詞と助動詞が前置詞フレーズの前にくるか否かだが、通常の前置詞構文においては、否定詞は前置詞の前におかれるというのがノーマルな形である。これは、前置詞が動詞起源であることを裏付けるものでもある。しかし、否定副詞や助動詞が前置詞フレーズより後ろにあらわれる例もある。これは、前置詞フレーズが一つ虚なレベルに向かっていると考えてもいい。

筆者は前置詞の上記から確かめられる動詞性の濃淡によって、大きく5つに分類した。前置詞としての機能がより強い、Group 1から順にみていこう。

### 3.1 Group 1：“关于”、“基于”、“每当”、“至于”

次の二つが Group 1 の共通する条件である。

- ①前置詞フレーズは主語より前にくる。
- ②常に前置詞フレーズの前に修飾成分（否定副詞、助動詞など）をおけない。

このグループの前置詞は、文型 B のみを許すものである。前置詞は単独で述語になれないとはいえ、“关于”などは、文章のタイトルになって単独で言うことも可能である。また、以下の例でもわかるように、これらはまた、“，”で区切ることができ、独立成分にもなれる<sup>6)</sup>。この点でも動詞性がすでにかなり薄れていると言える。

- 8) 关于这个问题，他们讨论了许久。『H 详』：205（この問題に関して、彼らは長い間議論した。）
- 9) 第一、第二个问题我们已经讨论了，至于第三个问题，我看下次再谈吧。『H 详』：676（一つ目と二つ目の問題はもう議論しました。三つ目の問題については次回に話をしませんか。）
- 10) 基于各种原因，会有差异。（もろもろの原因によって、相違がでてくる。）
- 11) 每当晚上感到很寂寞。（夜になるたびに寂しくなる。）

### 3.2 Group 2：“据”、“除”、“除了”、“对于”、“鉴于”、“正如”、“自从”、“作为”、“由于”

Group 2 の条件は次の二つである。

- ①前置詞フレーズは主語より前におくこともできる。
- ②常に前置詞フレーズの前に修飾成分（否定副詞、助動詞など）をおけない。

このグループは文型 A と文型 B が可能なものである。これらの前置詞は、前置詞フレーズの後に動詞フレーズを伴うが、前置詞フレーズが主語より前（文頭）におかれ、後続の述詞と離れて使うことが可能なものである。

この機能を有することが、前置詞の動詞性を欠く一つの条件となる。また、前置詞フレーズが主語の前であろうと後であろうと、前置詞フレーズの前に否定副詞、助動詞をおけない。この点からも、動詞性はかなり薄れていると言える。

以下の用例をみよう。

- 12) 鉴于他的表现，学校奖励了他五百元钱。『H 详』：264（彼の態度に鑑みて、学校は彼に500円の奨励金を渡した。）
- 13) 对于这种人应该批评教育。『H 详』：144（このような人については、説教して正す必要がある。）
- 14) 作为一名老师，应该对每个学生负责。『H 详』：708（一人の教師として、一人一人の学生に対して責任をもたなければならない。）
- 15) 自从买了录像机，他便天天晚上看录像。『H 详』：698（ビデオデッキを買ってから、彼は每晚ビデオをみている。）
- 16) 据我的调查，情况不是这样。『H 详』：299（わたしの調査によれば、状況はそうではない。）

これらの例はいずれも、前置詞フレーズの前に否定副詞“不”や助動詞をすでに挿入することはできない。否定副詞“不”や助動詞などが入る場合は、13)、14) のように、前置詞フレーズより後ろにでてくる。

ただ、この中でも“据”は、否定副詞のくる例、助動詞のくる例が検出されていない。そして、独立成分にもなることができる。つまり、後続の述詞と離れることができるのだ。このような点から言えば、Group 1 に近い部分もあり、この中でもより機能化していると言えよう。

3.3 Group 3：“本着”、“从”、“待”、“当”、“当着”、“对”、“根据”、“经”、“经过”、“连”、“连同”、“临”、“凭”、“凭借”、“顺着”、“通过”、“为了”、“为着”、“依”、“依照”、“因”、“因为”、“在”、“照”、“照着”、“针对”、“遵照”、“趁”、“趁着”、“乘”、“按”、“按照”<sup>7)</sup>

Group 3 の条件は以下の二つである。

- ①前置詞フレーズは主語より前におくこともできる。
- ②文頭（主語より前）に前置詞フレーズをおいた場合には、前置詞フレーズ



ズの前に修飾成分（否定副詞、助動詞など）をおけない。

上の②の条件は、文型Aも文型Bも可能だが、文型Bの場合は、その前に修飾成分をおけないということである。前置詞フレーズが文頭におかれることにより、前置詞フレーズの前に、否定副詞、助動詞もおけなくなる。前置詞フレーズは、文頭におくという機能によって、文型Aしか許容しない前置詞のグループよりも一歩虚な用法をもつと言える。また、前置詞フレーズの前に何の修飾成分もおけなくなることも動詞性を欠く一つの条件となる。

“対”フレーズが文頭にくると、話題化の機能をもつことは、中西2010でも主張しているが、“対”に限らず、他の前置詞でも、文頭にくる機能をもつと、あらゆる修飾成分をつけることはできず、話題化の機能を有する。

まずは“対”の場合をみよう。“対”フレーズが文頭にきた場合、修飾成分は前置詞フレーズより前にはおくことはできず、後ろにくる。

- 17) 对这种人不放心。『H 详』：163（このような人には安心しない。）
- 18) 对生活有困难的同学，大家应该帮助他们。（生活が困難な学生については、みんなで彼らを助けなければならない。）
- 19) 对什么都要限制一通。『H 详』：560（何に対しても一度制限をしなければならない。）
- 20) 对他要继续监视下去。『H 详』：258（彼に対しては引き続き監視し続けなければならない。）

これらの例の否定副詞や助動詞は“対”の前にはおけない。次に“从”の例をみよう。

- 21) 从这一点上就可以知道他是什么样的人。（この点から彼がどういう人かがわかる。）
- 22) 我们应从这一点出发考虑问题。『H 详』：80（わたしたちはこの点から出発して問題を考慮しなければならない。）
- 23) 进行经济建设要从长远利益出发。『H 详』：80（经济建设を行うには長い目でみた利益から出発しなければならない。）

21) は“从”フレーズが文頭にくるパターンである。文頭にくる場合は、“从”の目的語に“上”や“里”の場所をあらわす接尾辞がついて、いわゆる“框式介詞”を形成し、独立成分になる。それによって、“从”の前にあらゆる成分をつけることを許さなくなるわけである。あとの二つは文中にくる例だが、文中にくる場合は前置詞フレーズより前にも修飾成分がくることが可能になる。

同様の状況は以下の“在”の例でもみられる。24) と 25) は文頭にくる例で、修飾成分はその前におくことはできない。“在”フレーズが文頭にくると、目的語がより抽象的なものになり、一般論的な発言をするニュアンスをもつ。

26) は文中におかれた例だが、その場合はまだ文頭におかれる例より動作性は薄れていない。それもあって、修飾成分をおくことも可能である。

24) 在这一点上，我跟他差得非常远。（この点においては、わたしは彼とははるかに劣る。）

25) 在北京有好几种专门给日本人看的杂志。『美』（北京には何種類もの日本人向けの雑誌がある。）

26) 他要在这儿守下去。『H 详』：477（彼はここで守り続けなければならない。）

その他の例もみてみよう。27)、28) は前置詞フレーズが文頭にきた例である。27) の例のように文頭にきて、話題化する例もみられる。“针对”フレーズは文頭におかれ、さらに前置詞フレーズの後ろを“，”で区切り、独立成分になっている。28) の“通过”の例も同様である。

29) の“照”の例は文頭にきた例ではないが、助動詞が文全体に対してかかっている例である。その結果、“照”フレーズは独立成分にはなれない。独立成分になれないのは、後続の述詞フレーズとの関係がより密接であるからである。これは、文頭におかれて“，”で切り離せるというような、前置詞としての次の段階へはすすんでいないということである。

27) 针对这一问题，王厂长耐心地解答起来。『H 详』：284（この問題については、王工場長は辛抱強く答え始めた。）

28) 通过老张介绍，我认识了他。『白』：1424（張さんの紹介を通じて、

わたしは彼と知り合った。)

- 29) 应该照现在的样子接待下去。『H 詳』: 279 (今の状態の通り受け入れ続けなければならない。)

このグループのうち、“趁”、“趁着”、“乘”は、否定副詞は前置詞フレーズの前後ともにおけるが、助動詞は前置詞フレーズの前にしかおけない。この点では、若干動詞性を残しているとも言えよう<sup>8)</sup>。以下は“趁”の例である。

- 30) 我想趁暑假两个月去北京学汉语。(夏休みの二ヶ月のうちに北京へ中国語を勉強しに行きたい。)

### 3.4 Group 4: “打”、“借”、“就”、“随”、“为 (原因・目的)”、“沿”、“沿着”、“以”、“由”、“至”、“自”

Group 4 の条件は以下の二つである。

- ①前置詞フレーズは主語より前におくこともできる。
- ②修飾成分 (否定副詞、助動詞など) は前置詞フレーズの前のみを許す。

- 31) 别为这事生气。『H 詳』: 460 (こんなことのために怒らないの。)

- 32) 老常也想给路人提个醒, 冰雪天气, 最好不要沿着建筑物行走, 以免楼顶尚未融化的冰块掉下砸伤路人。<sup>9)</sup> (常さんも道行く人に注意したい、凍てつくほどの日は屋根からまだ凍っているツララが落ちてきて怪我しないように、建物にそって歩かないのが一番であると。)

Group 4 は前置詞フレーズを主語の前におくこともできるが、たとえ、主語の前にきたとしても、ここでも修飾成分は前置詞フレーズの前にしかおけない。そして、文型 B の場合は、修飾成分は前置詞の前におくことができない。これはつまり、前置詞自身の動詞性はまだ残っていると考えられる。

3.5 Group 5：“把”、“被”、“朝”、“朝着”、“给”、“跟（随伴、共同行為の対象）”“管”、“和（随伴、共同行為の対象）”、“将”、“叫”、“尽 jìn”、“让”、“替”、“同（随伴、共同行為の対象）”、“往”、“望”、“为（行為の対象）”、“为（wéi = 被）”、“向”、“向着”、“像”、“用”、“于”、“与（随伴、共同行為の対象）”

- ①前置詞フレーズは主語より前にはおけず、第一動詞の位置にしかこない（文型Aの形のみ許す）。
- ②修飾成分（否定副詞、助動詞など）は前置詞フレーズの前のみを許す。

このグループに入る前置詞は、この分類の中でも一番動詞性が色濃く残っているグループである。前置詞は、連動式で言えば、第一動詞の位置におかれ、なおかつ、修飾成分の位置も前置詞フレーズの前しか許されない。その点でもまさに“半動半介”と言える。

まず、“跟”の例をみたい。いずれも否定副詞や助動詞などの修飾成分のある例である。一方的な「怒る」という動作であっても、双方向的な「付き合い」、「対話」であっても前置詞フレーズより前に修飾成分がきている<sup>10)</sup>。それは、前置詞が後続の動詞フレーズとのつながりを求めるからである。つまり、前置詞に動詞性を残しているからである。

- 33) 你別跟她生气。『H 详』：460（彼女に怒ってはいけない。）
- 34) 他没跟这种人交际过。『H 详』：272（彼はこのような人と付き合いをしたことがない。）
- 35) 工人们要跟老板对话。『H 详』：143（労働者たちは主人と話をする。）
- 36) 你该和我商讨一下。『H 详』：446（あなたはわたしと相談しなければならぬ。）

次に“把”の用例をみる。“把”も後続の動詞フレーズとのつながりが強いので、修飾成分を動詞の前にはさむことができない<sup>11)</sup>。なお、「否定副詞は“把”より前にくる」ことは辞書や文法書に明記されている<sup>12)</sup>。

- 37) 不把他看作朋友。『H 详』：310（彼を友達としない。）
- 38) 要把里面的含义讲出来。『H 详』：268（内面の含意を話さなければ

ならない。)

39) 不能把这两个问题混淆起来。『H 詳』: 241 (この二つの問題を混同してはならない。)

40) 老师嘛, 就是应该把书教好。『H 詳』: 355 (先生というものはね、授業をしっかりとやらないといけないんですよ。)

以下は“为”, “替”の例である<sup>13)</sup>。“为”や替”も後続の動詞フレーズとのつながりがより強いため、修飾成分は前置詞フレーズの前しかおけない。

41) 不为别人着想。『H 詳』: 696 (他人のために考えてはならない。)<sup>14)</sup>

42) 律师还想为他辩护下去。『H 詳』: 35 (弁護士はまだ彼のために弁護し続けたいと思っている。)

43) 我们应多替国家设想。『H 詳』: 453 (わたしたちは国家のためにたくさん考えなくてはならない。)

このグループは、文型Aの形を維持しつつ、前置詞自体の虚化の度合いはいわゆる“半動半介”の場合もある。

前置詞が文型Aの位置で用いられていても、本来の動詞の意味を残していれば、動詞性を維持している“半動半介”な前置詞と言える。そして、動詞としての本来の意味がすでに薄れていればそれは前置詞と言ってもいいだろう<sup>15)</sup>。さらに、文型Aから飛び出て文頭にくる機能まであれば、それは“完全介詞化了的(完全に前置詞化した)”前置詞と考えられるだろう。

#### 4. まとめと今後の課題

以上、前置詞の中の成員の再分類を試みるために、修飾成分の入る位置や前置詞フレーズを文頭におけるか否かなどから個々の前置詞の特徴を再確認した。【表1】は、「介詞庫」のデータに基づいて、前置詞の分類した結果を踏まえて、表にしたものである。

【表1】機能化の度合いによる前置詞の分類

Group	実→虚 レベル	主 前後	修飾 成分 位置	前置詞	文 型	備考
1	虚	前	後	“关于”、“基于”、“每当”、“至于” 框式介词“对～来说”、“从～来看”	B	
2		前 後	後	“据” “除”、“除了”、“对(于)(コト の対象)”、“鉴于”、“正如”、“自 从”、“作为”、“由于”	A B	
3		前 後	前 後	框式介词“从～上”“从～里” “本着”、“从”、“待”、“当”、“当 着”、“对(対象はヒトまたはモノ)”、“根据”、“经”、“经过”、 “连”、“连同”、“临”、“凭”、“凭 借”、“顺着”、“通过”、“为了”、 “为着”、“依”、“依照”、“因”、“因 为”、“在”、“照”、“照着”、“针 对”、“遵照”、“按”、“按照” “趁”、“趁着”、“乘”	A B	文型Bの場合は 修飾成分をその 前におかない。
4		前 後	前	“打”、“借”、“就”、“随着”、“为 (原因・目的)”、“沿”、“沿着”、 “以”、“由”、“至”、“自”	A B	文型Bの場合は 修飾成分をその 前におかない。
5	実	後	前	“把”、“被”、“朝”、“朝着”、“给”、 “跟(随伴、共同行為の対象)” “管”、“和(随伴、共同行為の 対象)”、“将”、“叫”、“尽 jìn”、 “让”、“替”、“同(随伴、共同 行為の対象)”、“往”、“望”、“为 (行為の対象)”、“为(wéi=被)”、 “向”、“向着”、“像”、“用”、“于”、 “与(随伴、共同行為の対象)”	A	

※“比”、“离”、“跟”については述詞に主として形容詞がくるため、今回の分類に入  
れていない。以下はそれぞれの特徴を簡単にまとめたものである。

“比”：前置詞フレーズは主語の前にはくことはできない。否定副詞は前置詞フレー  
ズの前のみ可能。助動詞はいずれにも入らない。

“离”：前置詞フレーズは主語の前にはくことはできない。否定副詞は前置詞フレー  
ズの後ろのみ可能。助動詞はいずれにも入らない。

“跟”：前置詞フレーズは主語の前にはくことはできない、否定副詞は前置詞フレー  
ズの後にくるのが基本形。助動詞はいずれにも入らない。

より介詞的な用法をする Group 1 からより動詞性が強い Group 5 に  
わけた。より虚なものであれば、文型 B を許容する。同時に修飾成分は動

詞の前から前置詞の前へ移行している。動詞性を残していれば、文型Aの前置詞フレーズの前に修飾成分がおかれ、Group 5では、文型Aしか許容しない。否定副詞のおかれる位置、助動詞のおかれる位置の移行の経過からみてとれる。

ただ、分類の指標とした、「介詞庫」の前置詞の成員選定、データ結果には若干問題もある。ここで改めて、【表1】をみながら、上でふれられなかったことも含めて、追加点、変更点、問題点を挙げ、最後のまとめをしたい。

### (1) 框式介詞の追加

框式介詞について、「介詞庫」はあまり重視していない。框式介詞は文頭と文中に使われる場合がある。文頭に用いるものには、“対～来说”や“从～来看”といった、ある視点から述べるものがある。これらは文頭に用いられ、修飾成分も前におくことはない。

また、文中にも用いることが可能なものに“从～上”や“从～里”がある。これらは目的語が具象的、抽象的にかかわらず、ひとつの場所化されたものを表す。もちろん、範囲指定の働きとして文頭にくることも可能である。これら框式介詞については、【表1】のGroup 1とGroup 3の中に追加して入れた。この框式介詞についてはさらに考える必要がある。

### (2) 文頭にくる前置詞フレーズについて

文型AとBをともに許容する前置詞はGroup 2からGroup 4である。今回は、文頭にくるか否か、修飾成分をどこにおくのかのデータ結果により、この分類にしたが、使用頻度でみていくとまた異なる結果を得られ、そこから実と虚の差がみえてくるだろう。

いずれにせよ、前置詞フレーズが文頭にくる場合は、その前に修飾成分をおけなくなり、文中にでてくる前置詞フレーズとは異なる働きをする。主語を後ろにおいて、後続の動詞フレーズと縁を切ってでてくる。したがって、これらはより虚な用法と言える。

### (3) 前置詞の目的語が抽象的か具象的かをわけた場合の前置詞の実と虚の度合いが見えない。

この「介詞庫」では、なぜか“为”にだけ目的語による分類をしている

が、その他の前置詞についてはしていない。筆者も“跟(和, 同, 与)”や“对”に対しては分類したが、その他はしなかった。ヒト、モノ、場所、時間と目的語による実と虚の差があるのであれば、よりみえてくることもあるかもしれない。ただ、そこまで細分化していくことが有意義な作業かどうかは今のところはわからない。

#### (4) 前置詞フレーズがならぶとき

前置詞を使う場合に、PP が連続して使う場合がある。前置詞フレーズがならぶパターンは、多くは二つだが、三つならぶ場合もある。この中で、44) のように PP<sub>1</sub> と PP<sub>2</sub> の語順を全く変更できない場合と、50) のように話者の語感によって、変更可能な場合とがある。例えば、

- 44) 地球由东向西运行。『H 详』: 640 (地球は東から西へ動いている。)
- 45) 他在公园跟朋友约会。『H 详』: 637 (公園で友達と会う約束をしている。)
- 46) 用烟把他从洞里薰出来。『H 详』: 589 (煙で彼を洞穴からいぶり出す。)
- 47) 校长在全体会把问题都检讨了。『H 详』: 261 (校長は全体会で問題をすべて検討した。)
- 48) 用探照灯向四周照射起来。『H 详』: 658 (サーチライトで四方を照らした。)
- 49) 用各种方法把会场气氛活跃起来。『H 详』: 242 (いろいろな方法で会場の雰囲気をもりあげる。)
- 50) 怎么把自己从对方的 QQ 里删除? (どうやって自分を相手の QQ から削除するのか。)

このような連続するパターンを形成可能なものはより動詞性の強い、Group 3 から Group 5 に限られる。前置詞フレーズの順序を変えられない場合は、連動文と同じように、時間的な経過とのかかわりが強いことが感じとれるが、前置詞フレーズの順序を変えられる場合は、どのような条件をもって、この順番が決まってくるのだろうか。

何人かのインフォマントに確認したところ、先にくるほうが強調したい、話の話題となっているとか、前置詞フレーズの順番を変えられるがやはり今の語順がどうもしっくりくるというような反応で、もう少し考えてみる



余地がある。

今のところ筆者の思うところは、ここで述べてきた、前置詞間の動詞性の差が一つの要因としてあるのではないかと思う。動詞性のより強い前置詞は、後続の動詞とのかかわりも強いので、文頭にもってこれられないということから考えると、動作性が弱ければ、前置詞フレーズが並んだ場合に動詞から離れていくのではないかと考える。

もう一つの要因として、後続の動詞フレーズとのつながりとも影響するのではないか。動詞フレーズとつながりが強い前置詞フレーズが動詞フレーズに近いところに位置する状況があるように思う。

例えば、47) だが、動詞“検討”とつながりの強いのは“把問題”のほうである。もし、この文から前置詞フレーズを削除するならば、“在全体会”よりも“把問題”のほうが削除しづらく、やはり必要不可欠なフレーズと言えよう。

また、【表1】の結果からみても“在”はGroup 3、“把”はGroup 5で、“把”のほうがより動詞性を残していることで、先ほどの一つ目の要因とも合致している。

このような、何らかの要因によって、前置詞フレーズの語順が決まると考えられる。これらをさらに検証することで、さらに前置詞の動詞性の濃淡の細かな差がみえるのかもしれない。

私たちが前置詞を考えるときに、どこからが前置詞かという問題と常に向き合うことになる。こうしてみると、現時点では大きな枠でのルールが存在したとしても、前置詞というカテゴリーに入れられた一つ一つのは、やはりパラエティに富んでいるとしか言いようがない。

ただ、この再分類を通して、前置詞のある程度の文法的な特徴を知ること、学習者の前置詞に対する理解を助け、誤用も防ぐことができるのではないだろうか。

## 注

- 1) 前置詞の再分類を試みた先行研究に針谷1996がある。針谷1996は前置詞句と副詞・主語が共起する場合の語順、主語の前にくる場合、前置詞句が定語(連体修飾語)になる場合の意味の制限から前置詞の性質は一樣ではなく、

その違いを統語論的に論証したものである。ここでは再分類する際の指標を提示し、その指標を実例により検証し、再分類が可能であることを確かめるにとどまっている。

- 2) Chao Yuanren 1968『A GRAMMAR OF SPOKEN CHINESE』8.2でも、「いくつかの他動詞が連動式の第一動詞の位置におかれることがあり、これを副動詞 (coverb, K) と呼ぶことができる。この中でも、いくつかはこの位置にしかでてこなくなり、他の場所にはでてこない。それは本当の介詞である。(筆者訳)」と言及している。さらに、「介詞の最も重要な特徴はアスペクト変化がないことであり、また述語の中心としては用いない(筆者訳)」としている。前置詞はこれまで述べてきたようにフレーズだけで述語になるのは難しく、後続の動詞フレーズなどが必要である。
- 3) “和”、“与”、“同”も同じ用法の場合はこれに準ずる。
- 4) 実際は、“我跟他不一样。”の方が頻出の表現で、教学の現場でもこちらを教えるが、“我不跟他一样。”も非文ではない。
- 5) 針谷1996では副詞“也”と“都”の位置についても前置詞の下位分類を決める条件としてあげている。この二つは文頭にくる前置詞フレーズにつくことはなく、また、かかるもの(主語または前置詞の目的語)によって位置の移動をするので前置詞の動詞性を測るには難しいので本稿の条件からははずした。ちなみに「介詞庫」にもこの項目はない。
- 6) 藤堂ら1985: 117は“对于”、“关于”、“至于”を例に「これらはわりあい独立性が強く、述語動詞との縁を切って、文の冒頭にとびだし、文全体にかかわることが多い」として、これらを「変形」例であると指摘している。
- 7) 「介詞庫」で、“按照”について、否定副詞は前置詞フレーズの前、助動詞は前置詞フレーズ前後可能となっている。しかし、“按(照)規定他们不应该买股票。(規定では彼らは株を買えない。)”の例からみても前置詞フレーズの前後とも可能であることがわかるので Group 3 に入れた。
- 8) インターネット検索では“趁暑假三个月, 我想挑战一下自己!(夏休みの三月月のうちにわたしは自分を試したい。)”のような例がみられる。「介詞庫」では“趁”は独立成分にもなれないので、このような例は例外的な用法であろう。しかし、文頭におく機能は有するので、“趁”自体の機能化がすすめば、自ずとこのような例がでてくるのも不思議ではない。
- 9) 瀟相晨报 2008-1-29〈冰雪天别沿着建筑物行〉<http://www.xxcb.com.cn/show.asp?id=895972>
- 10) 例えば、“你多跟他商量。”『H 詳』: 191 (彼とたくさん相談しなさい。)のように“多”も前置詞フレーズの前にくることが可能である。
- 11) 呂淑湘1979: 88では“把”“被”“由”を介詞の中でも特殊なものとし、「介詞が導く主体と客体とはどれもびたりとついていて、語義が一貫していて、

修飾機能を果たしているだけの状況語とは言にくい（筆者訳）」と指摘している。

- 12) 例えば、『白水社 中国語辞典』：23にも、「否定副詞や助動詞は一般に‘把’の前に用いる」と明記されている。ただ、王还1984: 33-34に例外として否定副詞をもつ熟語については後ろにくる場合があるとの指摘がある。
- 13) 同類のものに“帮”がある。“帮”もこの位置に多く用い、且つ本来の「助ける」より「代わりに」というニュアンスが強い。したがって、前置詞として、この類に入れてもいいだろう。本稿ではここでの補足のみとしておく。  
例) 别忘了明天帮我把书买来, 啊! 『H 译』：1（わたしのために明日日本を買ってくるのを忘れないでよ!）
- 14) 『HSK 词语用法详解』：696の“着想”には“否定词‘不, 没’只能放在‘为、替’前”とある。“着想”自体は自動詞で後ろに目的語はとれない。また、小学館『中日辞典』第2版にも同様の記述がある。
- 15) Li and Thompson 1981, 9.1.2でも、すでに動詞としての用法を持たず前置詞用法しかもたないもの、前置詞と動詞用法を持ってもすでに意味のつながりがないもの、前置詞用法と動詞用法を持ち、意味的な変化がないものにわけている。

## 参照文献

### [英語文献]

- Li and Thompson 1981 *Mandarin Chinese A Functional Reference Grammar*. Berkeley, CA. University of California Press  
 Chao Yuanren 1968 *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley, CA. University of California Press

### [日本語文献]

- 伊地智善継編 2002 『白水社 中国語辞典』白水社  
 藤堂明保、相原茂 1985 『新訂 中国語概論』大修館書店  
 中西千香 2002 「“对”の意味・機能と文法化（虚化）」『愛知論叢』73号：PP. 65-88  
 中西千香 2005 「“跟”の意味拡張について—結びつく動詞を通して」『中国語学』第252号：PP. 210-228  
 中西千香 2010 「現代中国語“对”における機能分化について」『言語と文化』第22号：PP. 35-53 愛知大学外国語教育研究室  
 針谷壮一 1996 「介詞の下位分類について」『中国語学』第243号：PP. 124-133

### [中国語文献]

- 黄南松、孙德金主编 2000 『HSK 词语用法详解』北京语言大学出版社

呂叔湘 1979 『汉语语法分析问题』 商务印书馆  
王还 1984 『“把”字句和“被”字句』 上海教育出版社  
俞士汶 2003 『现代汉语语法信息词典』 清华大学出版社

### 引用文献

『美』：荒川清秀ほか共著 2003 『中国語見たり聞いたり15章—美紀の北京探訪』  
光生館  
『H詳』：黄南松 孙德金主编 2000 『HSK 词语用法详解』 北京语言大学出版社  
『白』：伊地智善繼編 2002 『白水社 中国語辞典』

※本論文の例文は上記引用文献や作例によるものだが、すべてインフォマントのチェックを受けていることをここに断っておく。インフォマントとして西安出身北京在住30代女性、西安出身北京在住40代女性、北京出身北京在住30代女性にお願いした。

※本論文は、2009年度日本中国語学会東海支部例会（2009.10.21 於名古屋大学）での「機能からみた前置詞の再分類—実から虚へ—」の発表をもとに加筆、修正したものである。